

ビヨツの週末 しゅうまつ パティシエール ①

イラスト：おと ななミツ





登場人物紹介

...

p4

レシピ①

丸ごとメロンソーダ

...

p6

レシピ②

ピーナッツバターのパウンドケーキ

...

p8

レシピ③

近江茶のスコーン

...

p10

レシピ④

びわのコンポートゼリー

...

p12

プロローグ

...

p14

スイーツ①

農家カフェは大忙し＊北海道

...

p52

スイーツ②

思い出の手作りバター＊千葉

...

p94

スイーツ③

憧れのアフタヌーンティー＊滋賀

...

p130

スイーツ④

愛情たっぷりコンポート＊長崎

...

p163

登場人物

ひのいちか
日野 一花

かしだいす しょうがくご
お菓子が大好きな小学五
ねんせい
年生！ ひよんなことか
しゅうまつ げんてい
ら週末限定で、パティス
リーをやることに!?

あずま れんと
東 蓮人

しょうがくご ねんせい おんな
クールな小学五年生。女
こ にがて
の子が苦手みたいだけど、
いもうと やさ
妹には優しくて……!?

モコ

ひつじ
羊のクッキーから生まれ
た、クッキーの妖精。魔法
ようせい まほう
が使えるちゃう!

モコヒト

にんげん へんしん すがた
モコが人間に変身した姿。
イケメン……!

さやま みみ
佐山 美海

いちか おば やさ
一花の叔母。優しくて、
しんばいしょう
たまに心配性。

さやま
佐山 みつき

いちか
一花のおばあちゃん。お
かしづく ほん
菓子作りがとっても得意
とくい
なんだけど……!?

ヒミツのレシピ

おばあちゃんが持ってい
たヒミツのレシピ本。で
も、おばあちゃんのおく
き
憶がないから今はまっくろ
いま
に塗りつぶされている。

レシピを
かんせい
完成させると、
きおく
記憶も
もと
戻るモコ!



まる れごとメロンソーダ



ポイント

♥今回は小ぶりなアンデスメロンを使用。好みのメロンで試してみてね。

材料

メロン……1玉 (1200g)
バニラアイス……適量
好みのサイダー……適量

メロン
こぶん
1個分

作り方

- ① メロンは半分に切る。種をくりぬぎ、半分は器にする。
- ② 残りのメロン半分をディッシャー等で丸くくり抜いたり、切ったメロンを星や花、ハートの型で抜く。
- ③ 器のメロンの上にバニラアイスに乗せる。
- ④ 周りに型で抜いたメロンを飾る。
- ⑤ お好みでサイダーを注いで完成！



Whole Melon Soda Float

ピーナッツバターのパウンドケーキ

(ホットケーキミックス)



Peanut Butter Pound Cake

ポイント

- ♥ピーナッツバターは分離しやすいため、しっかり混ぜてから計量しよう！
- ♥冷める前にラップをすることでしっとり仕上がるよ。

材料

ホットケーキミックス …… 150g
 バター …… 100g
 ピーナッツバター (無糖) …… 70g
 卵 …… 2個
 牛乳 …… 大さじ1

パウンドケーキ型
 1台分

下準備

- ・オーブンを170度に予熱しておく。
- ・パウンドケーキ型にオーブンシートを引いておく。
- ・バター、ピーナッツバター、卵は冷蔵庫から出して常温に戻しておく。

作り方



① 常温に戻して柔らかくしたバターとピーナッツバターをボウルに入れ、泡立て器でマヨネーズ状になるまで混ぜ合わせる。



② ①に室温に戻した卵を1つずつ加えて混ぜ合わせる。



③ ホットケーキミックスを加え、ゴムベラで粉っぽさがなくなるまで切るように混ぜ合わせる。



④ ③の生地にな乳を加えて混ぜ合わせる。



⑤ 型に流し入れ、表面を整える。真ん中に包丁で切り込みを入れる。170度に予熱したオーブンの下段で25分ほど焼く。



⑥ 竹串を刺して生地がついてこなければ焼き上がり。型から外し、ラップで包む。粗熱が取れたら好みのサイズに切る。

近江茶のスコーン



Omi Tea Scones

ポイント

- ♥生地はなるべく練らないように扱々と、サクリとした食感になるよ！
- ♥オーブンの焼き具合を見て、焼いている途中で天板の前後を入れ替えると焼きムラを防げるよ。(熱いのでやけどに注意！)

材料

ホットケーキミックス……150g

緑茶 茶葉……3g

バター……50g

牛乳……大さじ 3

ホワイトチョコレート……1/2 枚 (20g)

薄力粉 (打ち粉) ……適量

下準備

- ・オーブンは180度に予熱する。
- ・バターは1cm角に切り冷やしておく。
- ・茶葉はすり鉢でするか、包丁で細かくきざむ。

6分

作り方



① ビニール袋にホットケーキミックス・茶葉・バターを入れる。



② バターの塊をつぶすように手ですり混ぜる。



③ 牛乳を加え、さっくりと混ぜ、ひとまとまりにする (粉っぽい状態でもOK)。



④ 打ち粉をした台に生地を広げ、2cmほどの厚さに伸ばし、ホワイトチョコレートを乗せる。半分に切つて重ね、伸ばす工程を3回行う。



⑤ 生地を2cmの厚みに伸ばし、丸型で抜く。



⑥ クッキングシートの上にならべ、表面に牛乳 (分量外) をハケで塗り、15～20分焼く。

びわの コンポートゼリー



ポイント

- ♥びわの種も一緒に入れることで風味よく仕上がるね。
- ♥煮る時は沸騰させすぎないように火加減に注意してね！

材料

びわ……6個
★レモン……1/4個
★水……400ml
★白ワイン……大さじ2

★きび砂糖……50g
ゼラチン……5g
水……大さじ2

※風味が良くなりますがアルコールが
気になる方は入れなくても大丈夫です。

作りやすい
分量

作り方

- ① びわは半分に切って皮をむいて種をとる。レモンはよく洗い、薄切りにする。ゼラチンは水に振り入れてふやかしておく。
- ② 鍋に★を入れて火にかける。沸騰したらびわと種を加え、両面5分ずつ煮る。
- ③ 竹串で刺してスツと入るくらい柔らかくなったらびわと種、レモンを取り出す。びわは好みのサイズに切る。
- ④ 残りの煮汁(約300ml)が温かいうちに、ふやかしたゼラチンを入れて溶かす。
- ⑤ 容器にびわを入れて、④を注ぎ入れる。粗熱がとれたら冷蔵庫で2~3時間ほど冷やし固める。

桃缶のコンポートゼリー (びわがない場合)

材料

桃缶……1個(430g、固形量230g)
★桃缶のシロップ……200ml
★白ワイン……大さじ2

ゼラチン……3g
水……大さじ1.5

作りやすい
分量

作り方

- ① 桃缶を果肉とシロップに分ける。桃の果肉は食べやすい大きさに切る。
- ② ゼラチンは水に振り入れてふやかしておく。
- ③ 鍋に★を入れて火にかける。沸騰したら火を止める。温かいうちに、ふやかしたゼラチンを入れて溶かす。
- ④ 容器に①の桃を入れて、②を注ぎ入れる。粗熱がとれたら冷蔵庫で冷やし固める。

プロローグ

真っ赤な苺に、ぽつてりとした生クリーム。ふわふわのスポンジケーキは、口に入れたらしゅわりと溶けちゃう。金色のフォークで一口食べると、ほわわん、って優しい甘みと苺の甘酸っぱさがダンスするみたい。幸せの味、ってこういうことをいうんだと思う。

「おばあちゃんのショートケーキ、やっぱり最高！」

フォークを置いて両手で頬を包み込むと、おばあちゃんは笑った。

「一花は、いつもそう言ってくれるわねえ」

「だってだって、本当にそう思うの！ 何度食べても、毎回言わずにはいられない！」

わたしが力説すると、おばあちゃんは嬉しそうに顔をくしゃくしゃにする。

パティスリー・アンフルール。



誰もが認める、この町一番のスイーツ屋さん。なにを隠そう、そのパティシエールがわたしの**おばあちゃん**だ。

この町の人たちは、みーんな、おばあちゃんのスイーツといっしょに育ってきている。お誕生日ケーキはどのおうちも、アンフルールのショートケーキだったし、特別な日はアンフルールのスイーツでお祝いしてきた。

おばあちゃんのスイーツはいつだって、
たくさんの人たちを笑顔にしている。

わたしにとつておばあちゃんは、憧れの

パティシエール。

日野一花、小学五年生。

幸せのスイーツを作るおばあちゃんに
憧れる、**見習いパティシエール**です！

「はあ、疲れたあ」

夜の十時半頃。

喉が渴いて目が覚めた。

明日から**小学五年生**。始業式の前だから、ちよつとドキドキしてるのかも。

なんといったつて、クラス替えもあるし。

うちの学校は一学年に五クラスあるから、まだしゃべったことのない同級生もたくさんいる。

とにかくお水が飲みたくなって、ベッドを抜け出して階段を下りていくと、ちようど**美海ちゃん**が帰ってきたところだった。

「おかえり美海ちゃん」

「あれ、一花まだ起きてたの？ 明日学校でしょ？」

「うん、ちよつと喉が渴いちやつて」

美海ちゃんは、ママの妹。

つまり、わたしの叔母さん。

わたしはおばあちゃんの家で、おばあちゃん、美海ちゃんと三人で暮らしている。

だからといって、両親がいなくてかそういうわけじゃないよ。

ママとパパは、お仕事の都合でアメリカで暮らしてるだけ。年に一度は帰国するから会えるし、二日に一度くらいは画面越しで顔を見ながら通話もしてるし。

だけど今のわたしにとつて美海ちゃんは、保護者兼お姉ちゃんみたいな感じだ。

おおらかなおばあちゃんと違って、美海ちゃんは心配性。わたしのことも色々心配みたいで「あれやつたの？」とか「これやつておきなよ」とか、なにかと言ってくる。

ちよつと口うるさいと感じることもあるけど、それでもやつぱり大好きな家族。

「明日も早いんだから、すぐ寝なよ」

「はあーい」

美海ちゃんは都心にある大きな会社で働いていて、夜はいつも遅い時間に帰ってくる。

そういう人のことを、バリバリのキャリアアウーマンっていうんだつて。前にママが教えてくれた。

美海ちゃんは、そのまま風呂場に直行。

台所へ向かうと、おばあちゃんがなにかを書いてるところだった。

おばあちゃんも、まだ起きてたんだ！



「どうしたの、眠れない？」

わたしに気付くと、おばあちゃんはメガネを外して、ぐうっと伸びをする。

ううん、と首を振りながら冷蔵庫を開け、冷やしてあったお水をコップに注ぐ。

トプトプトプ、とこぼさないように。

「なんか目が冴えちゃった」

花柄のコップといっしょに、おばあちゃんの前の席につく。

本当は寝ないといけないのは分かっているけど、このままベッドに戻ったところですから眠れる気がしない。

「おばあちゃん、ちよつとおしやべりしようよ」

「えー？ 明日、眠くなっちゃうんじゃないの？」

そんなふう言いながらも、おばあちゃんもなんだか嬉しそう。

おばあちゃんとわたしは、おしやべりするのが大好きなんだ。

手元で開いていたノートをパタンと閉じたおばあちゃんは、「ちよつとだけね」と首をすくめる。

おばあちゃんのいうとおり、大好き。

大人だけど（しかもおばあちゃん！）、こうやって目配せをして、いたずらっ子みたいな顔をしていると、友達みたいに感じちゃう。

こんなところを美海ちゃんに見られたら「もう！ 早く寝なさい！」って言われそうだけれど、幸い、美海ちゃんのお風呂タイムは長い。

「美海が出てくるまでね」

おばあちゃんもお風呂場の方を振り返って、しーっとしながら笑う。

わたしたちはよく似ている、って、ママや美海ちゃんがよく言う。わたしにとってそれは、これ以上ないくらいの誉め言葉。

だってわたしはパティシエールとしてはもちろん、ひとりの人として、おばあちゃんみ

たいになりたいって思っているから。

「そうだ、**羊さんクッキー**食べる？」

「えっ、今日いっしょに作ったクッキー？」

「そうそう。一花用に、数枚持ち帰ってきたの」

おばあちゃんは「よいしょ」と言っ立ち上がると、
棚の上に置いてあったお皿を持ってくる。

そこには今日、わたしが**おばあちゃん**と作った**羊型**の
クッキーが四つ。

アンフルールのお店とわたしたちの家は同じ建物だけど、完全に仕切られている。
わたしはいつも、学校が休みのときや放課後は、お店で**おばあちゃん**の手伝いをしてい
るんだ。

今日だって、羊さんの形をしたバタークッキーをおばあちゃんといっしょに作った。

このクッキーはわたしの大好物。シンプルな味で、サクツとしておいしいの。

「一花も、羊さんクッキーはもう十分に上手に作れるようになったね」

「わあ、本当に!」

「うん、お客さんにも好評よ。これからもっと、一花が作ったスイーツもお店に並べてい
こうね」

「やったっつ!」

思わず立ち上がると、お風呂場の方から「一花、まだ起きてるの!」なんて**美海ちゃん**
の声が聞こえてきて、わたしは慌てて口を押さえる。

それから**おばあちゃん**と顔を見合わせて、小さな声で笑った。

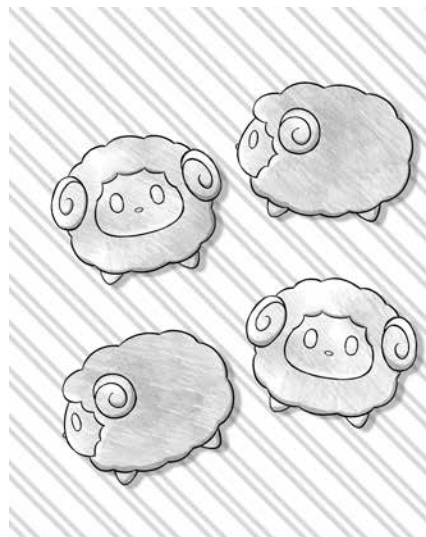
ドキドキの新学期。今日からついに、わたしも**小学五年生**だ。

桜はだいぶ散っちゃったけど、まだ少しだけ残っている。そんな中で、クラス分けが
貼ってある**掲示板**を見上げた。

「あ、あった!」

ずらりと並ぶ名前の中、自分の名前を見つけるのは結構大変。

今年は**五年三組**みたい。担任の先生は、優しいと人気の**林先生**だ。ついてるぞ!



「他に誰がいるかな」

同じクラスのメンバーを確認すると、仲のいい子たちの名前もちらほらあって、小さくガッツポーズをする。

すると。

「えー、東くん三組だつて!」

「本当だ。同じクラスになったかつたのに」

すぐ隣にいた女の子が残念そうな声を出すと、もうひとりの女の子がはあくため息をついた。

東蓮人くん。

かつこいいと人気だけど、色々と難アリなんてことも言われてる。

なぜかというと――

「あつ、東くん!」

隣の女の子の声に、つられるように振り向いた。

ちようど掲示板を見に来た東くんは、女の子の声なんか聞こえてないみたいに無反応。自分のクラスを確認すると、「お、おはようつ!」とはにかみながら挨拶する女の子を

完全無視して、すたすたと歩いていった。

そう。東くんはとてつもなく、**感じが悪い**んだつて。

「今日もクールでかつこいい!」

「本当だよね、そこがいい!」

だけど不思議なことに、そういうのも含めて人気がみたい。わたしにはちよつと、分からないけど。

それに「かつこいい」っていうのは、チョコレートケーキの「オペラ」みたいなものことだとも思ってる。つやつやつとしたチョコレートが光るオペラは、本当にかつこいいもん。まさにクールって言葉がぴったり。

ああ、やっぱりスイーツのことを



考えているときが一番幸せだ！

「日野一花です。お菓子作りが大好きで、将来の夢は立派なパティシエールになることです！」

新しいクラスでの自己紹介。

元気いっぱいにそう言っていると、友達が「一花の家はアンフルールなんだよ」と付け加えてくれる。

そうすると教室内で「ああ！」とか「いいなあ」とか、そういう声が聞こえてきて、すぐつたい気持ちになる。

わたしのことを知らなくても、アンフルールのことは知っている子がたくさんいる。その事実が嬉しくて、誇らしくて。

ゆつくりと教室内を見回したとき、じつとこちらを見ている**東くん**と目が合った。

わたしがにこっと笑いかけると、彼はあからさまに嫌そうな表情で窓の向こうに顔を向ける。

噂通り、ちよつと感じは悪いかも。だけど、人とコミュニケーションを取るのが好きじゃ

ないだけかもしれないし。

そういうのって、人それぞれだもんね。

わたしはもう一度クラスみんなをゆつくりと見回して「よろしくお願いします！」と元気よく言ってから席についた。

そのタイミングで、コンコンと教室のドアがノックされる。

林先生が廊下に出てしばらくすると、顔だけこちらに出して「日野さん、ちよつと」わたしのことを呼ぶ。

あれ、クラス替え初日だけど、もうなんかやつちやつた？

もしかして始業式るとき、きよろきよろよそ見してたのばれたかな。

うーん、そんなことくらいで呼び出される？

不思議に思いながらも廊下に出ていくと、そこには驚くことに、スーツ姿の美海ちゃん

がいた。

額に汗をかいているし、ハアハアと息も荒い。走ってきたのかもしれない。

いや、そんなことよりも！

「どうしたの？ 仕事は——」



そう言ったときに気が付いた。美海ちゃんの色が、走ってきたはずなのに、真っ白だっていうことに。嫌な予感が心臓のあたりを襲ってくる。

会社に行っているはずの美海ちゃんが、走って学校に迎えに来たということは――

「おばあちゃんが転んで、救急車で運ばれたの」

「ええっ……!!」

美海ちゃんは病院からの電話を受

けて、そこへ向かう途中に寄ってくれたみたい。

いやだ、もしおばあちゃんに万一のことがあったら……
「ランドセル持つてくる……!!」

泣きそうになるのをぐつとこらえるわたしに、美海ちゃんは黙って頷いた。

おばあちゃんは、わたしにとって本当に大事な存在。

おばあちゃんでありながら母親のようでもあり、師匠であり、なんでも話せる友達みたいな相手でもある。

そんなおばあちゃんに、もしものことがあったら――

「おばあちゃんっ!!」

急いで病室のドアを開けると、そこにはベッドの上でお茶を飲むおばあちゃんの姿。あれ?

なんだか、元気そう……?

「あらら、一花まで来てくれたの? そんな大事じゃなかったのに」
病院着のおばあちゃんは、わたしと美海ちゃんを見ると目を丸くする。それから申し訳なさそうな顔で「ごめんねえ、ちよつと転んだだけなのよ」と言った。

よ、よかつた〜!

おばあちゃん、無事だったんだ!

へなへなと力が抜けて思わずその場に座り込みそうになったところを、慌てた美海ちゃんが支えてくれる。

「もうお母さんたら……。本当、びつくりしたんだから!」

涙ぐみながらも美海ちゃんがおどけてくれて、一気に空気が軽くなる。

アンフルールにはちよつとした半地下のスペースがあつて、食品庫になつてゐる。おばあちゃんは、その階段を踏み外して、転んじやつたみたい。

「どうにか自力でお店までは戻れたんだけど。そのあと立ち上がれなくなつちやつてね」
ちようどそこへ、常連のお客さんがやつてきた。



頭を打つたということもあつて、心配して救急車を呼んでくれたんだつて。アンフルールもおばあちゃんも、本当に町の人たちに愛されている。

「それで、すぐに退院できそうなの?」

美海ちゃんの質問に、おばあちゃんは小さなため息をついた。

「それがねえ、どうも骨折しているみたいで。入院とリハビリが必要なんですつて。大事じゃない、つてさつきおばあちゃんは言つたけど。」

そんなことない! 骨折なんて! 入院とリハビリが必要なんて!

「それから……」

おばあちゃんは申し訳なきように、わたしのことを見る。

「お菓子作りに関することが、はっきりと思い出せなくなつちやつてね……」

「えっ!」

「でもね、一時的なものでしょうつてお医者さんは言つてたから。きっとすぐに思い出すわよ」

あとでお医者さんから詳しく話があるそうだけど、そんな深刻なものじゃないみたいでほつと息を吐き出した。

「年をとると、色々ためね」

ふふ、と力なくおばあちゃんが笑う。

そのとき、わたしは思い出していた。

それは少し前の夜のこと。

勉強の合間にリビングに行ったら、ちょうどおばあちゃんとママが国際通話をしているところだった。

いつも元気なおばあちゃんが、珍しくため息をついていたのを聞いちゃったんだ。

あのときもおばあちゃんは、今と同じ表情をしていた。

『年をとると、色々ためね。わたしのお菓子も、もう時代遅れなのかしら』——つて言いながら。

そのとき感じた不安が、ベッドの上のおばあちゃんの様子でよみがえる。

おばあちゃんがもうお菓子を作らなくなっちゃいそうな予感に襲われて、わたしは慌ててベッドに駆け寄る。

それからおばあちゃんの手を握った。

「そんなことないよ！ わたしもいるし、美海ちゃんもついてるよ！ だから大丈夫だよ、

絶対！」

わたしがおばあちゃんを元気づけなきゃ。

これまでずっと、おばあちゃんがそうしてきてくれたように。



病院を出た美海ちゃんとわたしは、ふたり並んで帰り道についていた。

今日は始業式だけだから、学校はもう終わっている。美海ちゃんも、このあとは在宅ワークに切り替えるって言っていた。

「おばあちゃん、怪我だけで済んでよかったね」

わたしがそう言うのと、美海ちゃんは「本当だよ」と大きな息を吐き出

した。きつと美海ちゃんも、電話をもらったときはヒヤリとしたはず。

わたしが頷くと、美海ちゃんはちよつと暗い顔で言った。

「だけど、お店はちよつと難しいかもね」

「え……？」

「退院までしばらくかかるだろうし。パティシエール不在じゃ、アンフルールもお休みするしかないでしょ。わたし、お菓子はまったく言っていないほど作れないし」

ため息といつしよに、「仕方ないよ」とあきらめの言葉を吐き出す美海ちゃん。

たしかに美海ちゃんは、お菓子作りも料理も大の苦手。

だからといって、アンフルールを完全にお休みにしてしまったら、楽しみにしているお客さんをつかりさせちゃう。

それなら――

「お店のお菓子作りは、わたしがやる！」

決意をこめて、胸を張る。

美海ちゃんは目をぱちくりさせてから、「いやいや、ちよつと待つて」と右手をおでこにあてて、反対の手を前に出した。

「大丈夫、ちゃんとできるよ！」
放課後や休みの日はいつもお店の手伝いをしているし、おばあちゃんといつしよにスイーツだつてたくさん作ってきた。たしかにまだ小学生かもしれないけど、おばあちゃんから認められているレシピだつてある。

る。

それに、わたしは知っているんだ。お店の棚の奥に、おばあちゃんの大仕事にできたレシピ本があることを。

「まず、一花は学校があるでしょ。

わたしだつて仕事に行かないといけないし」

「それなら、週末だけオープンさせるのはどう？ 今も美海ちゃん、仕事がお休みの日はお店にいてくれるでしょ」



「それはそうだけど……」

「それに……、銀行の人だつて来てるんだよね？」

なかなか折れてくれない美海ちゃんを、わたしはまっすぐに見る。

お店を続けていくには、お金がかかる。

この場所にアンフルールを建てたおばあちゃんは、そのお金を銀行から借りていて、ちよつとずつ返していると前に教えてくれた。

おばあちゃんは、『お店を続けるというのは、楽しいことばかりじゃないのよ』と、小さい頃から現実的なことも話してくれてたんだ。

「一花、知ってたの？」

美海ちゃんはちよつと目を丸くしてから、はあ、とため息をつく。

「お店を手伝っていれば、そういうのだつて気が付くよ」

「それもそうか。一花ももう、五年生だもんね」

美海ちゃんはもうひとつ息を吐き出すと、腕を組んだ。

「売り上げが伸びなければ、**お店をやめることも考えて**、つて。銀行の人からは言われている」

「ええ！」

思っていたよりも、状況は深刻だったらしい。

だけど、だつたらなおさら、おばあちゃんがない間にお店を閉めるわけにはいかない。

絶対に、おばあちゃんのパティスリーを守りたい！

わたしは足を止めると、背筋を伸ばして深呼吸をする。それに気付いて振り向いた美海ちゃんに、勢いよく頭を下げた。

「美海ちゃん、一生のお願い！ わたしにチャンスをください！」

スカートを握る両手に、きゅつと力が入る。

一生のお願いなんて、今まで何回も使ってきた。

だけど今日のお願いは、本当に本当の、**“一生のお願い”**。

それに美海ちゃんだつて、おばあちゃんの大切なアンフルールを守りたい気持ちがあるはず。

「はあー……」

大げさなくらいの美海ちゃんのため息に、おそろおそろ顔を上げる。

美海ちゃんは両手を腰にあてながら、やれやれつて顔を振った。

「どうせダメって言っても、一花は聞かないでしょ」

顔をしかめながら、だけど諦めたように肩の力を抜いた美海ちゃんに、わたしは思い切り抱き着いた。

「わつ……！　ちよつと……！」

「美海ちゃんありがとう！　大好き！　神様！」

よろめく美海ちゃんに、もつとぎゅうつと強く抱き着くと、お花みたいな香水の匂いがした。

その香りは、わたしの背中まですつぽりと包んでくれて。

むぎゅーつと抱きしめ返してくれた美海ちゃんは、「はあー」とそのままの姿勢でもう一度ため息をつく。



「本当わたし、一花に甘いだよねあ」

口うるさくつて、厳しい。だけど美海ちゃんは結局のところ、わたしの気持ちを尊重してくれる。

「へへっ、美海ちゃんだーいすぎ」

「ずるいなあ、一花は」

自然と腕を組んで、おうち目指してゆつたりと進んでいく。

平日のお昼過ぎに、美海ちゃんと街中を歩く。こんなこと、なかなかないから新鮮な気持ちだ。

おばあちゃんのこととはびつくりしたけど、リハビリをすればよくなるって言ってたし。お店のことも、どうにかわたしに任せてもらえそうだし。

いろんな心配事がクリアになった途端、お腹がぎゅるるゝと大きな音をたてた。わたし、すぐにお腹が鳴っちゃうんだよね。

「そういえば、お昼ご飯も食べてなかったね」

美海ちゃんが笑いながらそう言っつて、わたしは何度もぶんぶんとうなずく。「なにかおいしいもの食べてこうよ！」

駅前^{えきまえ}の商店街^{しょうてんがい}は、平日^{へいじつ}の昼間^{ひるま}でも賑わ^{にぎ}っている。
うちのお店^{みせ}は、この商店街^{しょうてんがい}を抜^ぬけた先^{さき}の路地^{ろじ}を曲^まがったところにある。
本当^{ほんとう}はこの商店街^{しょうてんがい}のどこかにお店^{みせ}を出^だしたかったけど、その頃^{ころ}、ちょうどいい物件^{ぶつけん}がなかったんだって。

それでもたくさんのお客^{きやく}さんから愛^{あい}されるパティスリーになったのは、おばあちゃんの
努力^{どりよく}があったからこそだ。

「パスタもいいし、とんかつもいいなあ」

わたしがそう言う^いと。

「寿司^{すし}もいいし、そばもいいかも」

美海^{みみ}ちゃんがそう言う^い。

こうやって、なにを食べ^たようかときよろきよろしながら歩^{ある}くのも、商店街^{しょうてんがい}の楽^{たの}しみ方^{かた}のひとつ。だってここには、本当^{ほんとう}にいいお店^{みせ}がたくさんあるんだもん。

そうやって一軒^{いっけん}一軒^{いっけん}のお店^{みせ}を見てると、ぴかぴかのおしゃれな建物^{たてもの}があることに気が付^きいた。

とっても素敵^{すてき}で、外国^{がいこく}のお店^{みせ}みたい。

カフェとかかな。もしそうだったら、アンフルールのお菓子^{かし}を出^だしてくれたりしないかな。
わくわくした気持ち^{きもち}で、ドアに貼^はってあったお知らせ^しを読む^{よむ}。

世界^{せかい}でも有名なパティシエ^{ゆうめい}、

フルイチカズヤのパティスリーが
オープンします！

みなさんのお越し^{おこし}を、心^{こころ}より
お待ち^{まち}しています。

パティスリー・ミラージュ

美海^{みみ}ちゃんと思^{おも}わず顔^{かお}を見合^{みあ}わ
せる。フルイチカズヤさんといえ
ば、スイーツ界^{かい}では知^しらない人^{ひと}が
いないほどの有名人^{ゆうめいじん}。いろんなブ
ランドとのコラボ商品^{しょうひん}なんかも



作^{つく}っている。

そんなフルイチカズさんのパティスリーが、この商店街^{しょうてんがい}に!
とてつもない強力^{きょうりきよく}ライバルの出現^{しゅつげん}。

——わたしたち、どうなっちゃうの!?

まさかこんな近く^{ちかく}に、あの有名^{ゆうめい}パティシエのお店^{みせ}がオープンしちゃうなんて。
学校^{がっこう}でもご近所^{きんじよ}でも、ミラージュのことは大^{おお}きな話題^{わだい}になっている。
さらに、ピンチにはピンチが重^{かさ}なるみたい。

「ええっ、なにこれ!」

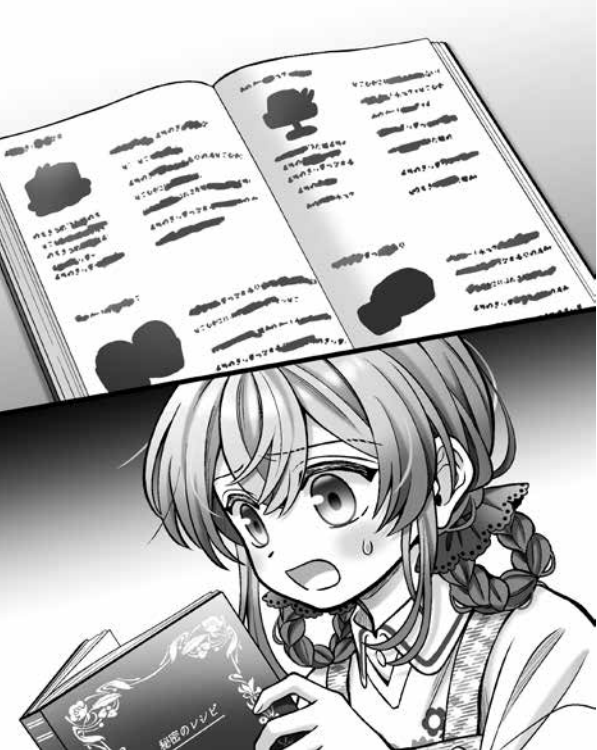
お店^{みせ}のキッチン^ばの、棚^{たな}の奥^{おく}。

引^ひつ張り出^だしてきたのは、おばあちゃんが大事^{だいじ}にしていたレシピ本^{ほん}。

たまに懐^{なつ}かしそうにそのページを開^{ひら}いていたおばあちゃん。わたしが読^よんだことはな
かつたけれど、そこにおばあちゃんのレシピのすべてが記^{しる}されている。

——はずなのに。

「全然^{ぜんぜん}読^よめない……!!」



「秘密^{ひみつ}のレシピ」と書^かかれた、外国^{がいこく}の小^{しょう}説^{せつ}のような立派^{りっぱ}な表紙^{ひょうし}。

見^みているだけでわくわくしそうなレシ
ピ本^{ほん}を開^{ひら}いて、わたしは愕然^{がくぜん}とした。

まるで黒^{くろ}いペンでいたずらされたみた
いに、レシピの一部^{いちぶ}が黒く塗りつぶされ
ていたから。

おばあちゃんが描^かいたのであろうス
イーツのイラストも、シルエットが分^わか
るだけの黒塗^{くろぬ}りになってしまっている。

「これじゃあ、なんのスイーツか分^わかん

ない……！」

レシピ本を逆さにしてみたり、横から眺めてみたり。

それでもやっぱり、どう頑張っても解説不能！ このレシピ本に、一体なにが起こったんだろう？

うーん、と腕を組んでいると、**ピピピピ**、とアラームが鳴り響いた。

「あ、クッキーが焼けたみたい」

レシピを見なくても、上手に作ることができるスイーツ。おばあちゃんから合格点をもたらっているのは、シンプルなバタークッキーだ。

お店に並べるために、レシピ本を開く前に仕込んだものが焼きあがったみたい。香ばしいかおりに、きゅん、と胸の奥が高鳴る。

おばあちゃんが初めて教えてくれた、生地を羊の型で抜いた「羊さんのクッキー」。オーブンを開けて、ミトンははめた両手で天板を取り出す。

「ん、いい感じー」

ほんのりと焼き色がついたクッキーたちは、見ているだけでも愛おしく感じちゃう。さくつとした歯触りとバターの香りが最高の、羊さんのクッキー。

冷やした牛乳と食べるのがわたしのおすすめ。美海ちゃんはブラックのコーヒーと食べるのがお気に入りなんだって。

つまり子供から大人まで、みんなが楽しめるクッキーだということ！ すうーつとクッキーの香りを楽しんだあと、そつとシンクの上に置く。

——と。

そのうちのひとつがみるみるうちに大きく丸く膨らんでいき、ぽんつと音を立って弾けた。

「きゃっ……」

キラキラと、金平糖みたいな七色の光が宙を舞う。

その真ん中から、**手のひらサイズのもこもこの羊さん**が現れた。

宙に浮いた羊さんは、ぱたぱたと、両手でキラキラの光を体からはたき落とす。



それからこほんと咳払いをすると、目をぼちぼちとさせるわたしの方へと向き直る。そうして「えっへん」と胸をそらせた。

「僕が来たからには、もう大丈夫モコ!」

「へっ!」

「だーかーらー! 僕が来たんだから、全部うまくいくモコ!」

「じゃ、しゃべってる!」

頭の中はパニック状態。

だってまさか、クッキーから羊さんが現れるなんて思わないもん。

しかも手のひらサイズだし、しゃべるし、浮いてるし!

羊さんはわたしの反応が不満なのか、唇をつんと尖らせる。

「まさか、僕のこと知らないモコ?」

「う、うん……」

素直に頷くと、今度はやれやれというように首を横に振った。

それからくると空中で一回転すると、じゃーんと両手を広げてポーズを決めた。

「僕はモコ! クッキーの妖精モコ!」

「妖精って、あの妖精!」

素つ頓狂な声を上げるわたしを見て、モコはふふんと笑ってる。

たしかに昔からおばあちゃんは、スイーツには妖精さんが宿るのよと話していた。だけどそれは、おとぎ話のようなものだと思っていたのに。

モコはびっくりしたわたしを見て、むんと胸を張る。

「一花は、秘密のレシピが読めなくて困ってる。そうだモコ?」

「わ、わたしのこと知ってるの!」

「みつぎの孫でしょ? もちろん知ってるモコ!」

みつき、というのはおばあちゃんの名前だ。

「モコとおばあちゃんは、知り合いつつない?」

わたしの疑問に気付いたのかもしれない。

モコはすいーつと飛んでくると、レシピ本をゆつくりと開いた。

「地図も、真っ白になっちゃってるモコね……」

わたしもレシピ本を見る。さっきは気付かなかったけれど、表紙を開いた先には日本地図が描かれていた。白黒のシンプルな地図だ。

「もともとは、色がついていたの？」

わたしが質問すると、モコは頷く。

「僕は昔、みつきと二人で全国を回って**四十七種類のレシピ**を集めたんだモコ。レシピが見つかった場所は、この地図に色がつく仕組みになつてるモコよ」

そのままモコは、ページをめくる。

わたしがさつき見たのと同じ、

虫食いされたように、文字やイラストが黒く塗りつぶされたようなレシピたちが現れる。

モコはそれを見ると、悲しそうにがつくりとうなだれる。

「これじゃ、なんのレシピか分かんないモコ……」

「モコとおばあちゃんが集めたレシピなんだよね？」

「そうだけど、僕もどんなレシピがあつたかは思い出せないんだモコ」

モコによると、これはただのレシピ本じゃなくて、**魔法がかかった特別なレシピ本**なんだって。

過去に、若い頃のおばあちゃんとモコで完成させたレシピ本。

だけど今回、おばあちゃんが頭を打ってお菓子に関する記憶を失ってしまったせいで、レシピ本が不完全な状態になってしまっているらしい。モコのレシピに関する記憶があまりふやになつちやつたのも、その影響みたい。

「みつきは、大丈夫なんだモコ……？」

心配そうな顔をするモコに、わたしは安心させるように「大丈夫だよ」と頷いた。そこで、ぴこんとアイデアが浮かぶ。

「ねえモコ、おばあちゃんに会いに行こうよ！」

おばあちゃんとモコは、ふたりでこのレシピ本を完成させた。

ふたりにはたくさんのおもひ出があるはずで、お互いにきつと特別な存在で。そんなモコに会えば、おばあちゃんもお菓子作りの記憶が戻るかもしれない。



我ながら名案！

そう思ったのに、モコはまた寂しそうに唇を尖らせた。

「そんなの、ムダだモコ。みつきは僕のことまで忘れてる。いきなり行っても、びつくりさせるだけだモコ……」

「それなら、思い出してもらえるようにしようよ！」

わたしが明るくそう言うのと、モコはびつくりしたように顔を上げる。

おばあちゃんは、忘れちゃってるんじゃない。

ただちよつと、思い出せなくなっているだけなんだ。

だって大事なことって、大好きな人のことって、心の中にきちんと刻まれているはずだもん。

「ねえモコ。わたしといっしょに、秘密のレシピをもっ一度完成させない？」

「ほ、本気モコ？」

「うんっ！ そしたらきつと、おばあちゃんもモコのことを思い出すよ！」

「そう思うモコ？」

「そうだよ！ それにわたしも、おばあちゃんにお菓子作りのことも思い出してほしいも

ん！」

若い頃のおばあちゃんが挑戦したことに、わたしもチャレンジしてみたい。

おばあちゃんみたいなのパティシエールになるために、精一杯頑張りたい。

秘密のレシピを完成させれば今よりもつと、たくさんのお客さんに来てもらって、喜んでもらえるようになるはず！

「分かったモコ！」

元気を取り戻したモコは、再び胸をそらせると、今度はガレージに出るようにわたしを促した。

お店の裏にあるガレージは、車が二台停められるようになっていた。だけど今は、美海ちゃんの自動車が一台中だけだ。

ガレージにやってきたモコは、またまた自慢げに胸を膨らませるとわたしの足元を指した。

そこに、小さい子が遊ぶようなミニカーがポン！ と出てくる。

おしゃれなミント色で、屋根の部分がこげ茶色でかわいい。窓からはひさしが出ていて、ちゃんとしたカウンターもついている。

ミニサイズというだけで、本物の
そっくりな細かい作りだ。

「これ、キッチンカー？」

「正解！」

ぽんっ！

モコが叫ぶと、再び金平糖みたいなキラキラが目の前に舞い上がる。

みるみるうちにミニカーが大きくなっていき、あつという間に本物のキッチンカーに大変身した。

「わあ！ モコすごい！」

魔法を見たのなんて初めて！

しかも、こんなにかわいいキッチンカーを出せちゃうなんて！
わたしがびよんぴよんと跳ねながらキッチンカーの周りをまわるのを、モコは満足そう



に見ている。

「中も本物だモコ。冷蔵庫もガスコンロもついているし、オーブンだって備え付け。本格派！」

自信満々の様子のモコの前で、実際に車内に入って「きやー！」と歓喜の悲鳴が出ちゃう。だって本当にすごいんだもん。中は広々してるし、ピカピカの最新設備。しかもおしやれなんだから！魔法の力で実際のスペースよりもずっと広がっているとモコが説明してくれた。

よし、このキッチンカーで色々な場所へ行つて、秘密のレシピを完成させよう！
「モコ、これからよろしくね！」

「どんなことでも任せるモコ！ 羊に金棒！」

「ふふつ、それを言うなら鬼に金棒だね」

どーんと胸を叩くモコに、わたしはとびきりの笑顔を向ける。

わくわくしてきた！

